

社会の期待に答えて

1970 年における革命的变化は人々に非常に影響を及ぼし、お互に責任のある (responsible) 社会的運動をひきおこした。教育上のプログラムにおけるこの責任 (responsibility) はしばしば accountability (義務と責任) として照会されている。作業療法士達は自分達の accountability を評価して誰に対して何のために accountable なのかを尋ねている。その答えは人が貢献出来るものは何であり、他の人々は何を期待しているのかを知ること、即ち、学習者は何を知っているのか？ 学習者は何を知る必要があるのか？ 期待される行動は何か？ 学習者が学ぶ方法は1つしかないのか？ 学習者が到達したということをどのようにして知るか？ 学習者の問題は何か？ 問題を解決するために学習者が知らねばならないことは何か？ 問題を確認する、焦点をつかむなどということは学習過程において最も困難な仕事とされている。問題が確認されるまでその目的を明記す

ることは不可能なことである。このように評価が出发点になる。期待がわからなかったり、理解されない時には、記述されているいろいろな学習のアプローチや予測される結果を整理しなければならない。Charles Reich は彼のベストセラー「The Greening of America」の中で 1970 年におけるアメリカについての central fact は我々の社会の実体とそれらについての我々の確信との間の差違であると述べている。もしもこれが正しければ我々の仕事は、(1) 期待を明確にする。(2) 周囲の期待を確立して、その中でそれぞれの個人が成功するようにする。(3) 結果を予測するための道理にかなった方法を助言すること、であろう。

Kathryn Schoen, Ph D: A Climate of Expectation, The American Journal of Occupational Therapy: Vol. 26, No. 3, 119, 1972

(リハビリテーション学院, 作業療法士 小川恵子)

スミス式手指機能評価

治療プログラムを計画したり、治療・手術又は投薬の効果を判定する上で、患者の手指機能を評価することは重要である。

Smith Hand Function Evaluation は、主として ADL に関連のある activity を使って、患者の手指機能を客観的に評価する目的で作成された。

この評価法は、大きく 4 つの Section から成っている。

Section A は、さらに 4 種類の Subtest、つまり①大きさの違う 3 つの積み木、② 4 本の長さの違う釘、③ 4 枚のコイン、④ 16 本のペグ、を用意し、それぞれを——つまみ・特定の場所へ移動し・離す——という動作を行なわせ、その時間を測定することで片手操作能力を把握する。

Section B では、①安全ピン、②バックル、③ボタン、④ジッパー、⑤ひも (たてむすび) ⑥ひも (蝶むす

び) ⑦靴ひも等、両手を使用する ADL からなる 7 種の Subtest によって両手動作能力の測定を行ない、さらに Section C で、署名をしたり、長方形・曲線をなぞること、等によって書く能力を、最後に Section D で、握力を測定する。

以上の方法によって、どの様な種類の障害者であろうとも、彼等の手指機能を客観的に、しかも比較的短時間、容易に評価することができる。

尚、この検査の作成にあたり、91 人の 21 才～63 才までの男女・健常者のデータが集められ、その結果 (平均値) を Evaluation Form に附記することで、患者の手指機能と健常者のそれを比較することができるようにしてある。

Hilda B. Smith, O. T. R.: Smith Hand Function Evaluation, The American Journal of Occupational Therapy, 27 (5), 244-251, 1973)

(都福祉センター, 作業療法士 金子 翼)

認知知覚運動障害の為の作業分析

OT が OT であるゆえんは、およそその治療の中に、種々の activities を使用する為であり、OT として我々は、治療に使用な固有の activity をその特性を考慮しながら選び、また、それらの特性は activity 分析の過程を通して発見出来る。この論文は、OT で古くから確立されているいわゆる機能的な面からの activity や task 分析の基礎的復習と、OT では比較的新らしい分野である認知知覚運動 (CPM) 障害の治療に用いる activity や task 分析の神経行動的アプローチに関するものである。

CPM 障害の為の適当な作業選択では、1つの activity や task によって示される感覚刺激の分析や、作業に含まれる内部感覚統合機構の分析、そして要求される運動反応の分析が必要となる。activity や task 分析のそのようなアプローチを、ここでは神経行動的アプローチと呼んでいるが、感覚刺激と運動反応は観察する事が出来、またその統合過程は推測可能と言えよう。例えば、容器のキャップをはずす作業では、基本的な感覚刺激と

して、触覚・運動覚・視覚が含まれ、その反応行動としては、運動・視覚があげられる。その他、皮細工のレーシングでは、触覚・運動覚・視覚・嗅覚が感覚刺激であり、視覚・運動がその反応として観察され、またそれらがフィードバックとしての input になる訳である。論文ではその他、OT でごく普通に使用される activities が分析されているが、言語による指示がなされる場合は全て、聴覚が刺激として含まれ、多くの場合複数の感覚刺激が含まれる事等が分かる。

このような作業分析によって、OT は CPM 障害に対して、もっと注意深い感覚刺激のコントロールを可能にし、各作業の特性を上手く利用する事が出来ると言えよう。

Lola A. Llorens, M.A., O.T.R. : Activity Analysis for Cognitive-Perceptual-Motor Dysfunction. A.J.O.T., November-December, 27 (8), 453-456

(都心身障害者福祉センター, 作業療法士 平尾恵美子)

PT・OT 相互教育プログラム

この論文は PT 及び OT のカリキュラムを Core Curriculum のアプローチで行う方法を提案し、それに対する反応を調査報告したものである。社会医療の要求は病院を中心とする医療から地域医療に移行している現在、医療は健康維持と予防に主眼をおいている。この新しい医療組織の中で役立つ人材を育てるにはそれに要求される新しい技術、役割を明らかにすることも必要であるが、その教育組織も又その要求に応えられるだけのものに順応されなければならない。医療関係職員が急激に増加している米国社会で教育費は上り教師は不足している。この現状で教育者及び運営関係者は効果的な教育法を真剣に考えている。その方法のひとつとして Core Curriculum がある。Dr. J. Mose はこの組織は設備の共同使用、教師の適切な配置、共同研究と共同指導、更に患者看護の改善を図れるものとして大きく指摘している。医療メンバーが相互に助けあって医療を行う今日、"learn together in order to work together" とは最も適切な方法である。更にこの教育法が徹底すれば実際の

臨床場で多面にわたって役立つ人材が育つとも云われている。

著者は 27 の PT・OT 校及び 1 共同校合計 55 の教育関係校にアンケートを送り PT は 74%, OT は 81% の反応を得た中から次のような結果を発表している。

1. 提案した Core curriculum 法は効果的である。
PT 60% OT 63%
2. この方法で育ったセラピストは有能性がある。
PT 35% OT 42%
3. この方法で育ったセラピストを要望する。
PT 40% OT 31%
4. 更に時間短縮を行えば臨床時間をカットし基本的原理から応用性の効く考え方を育てる。

等の意見である。くわしくは Figure & Chart に示されている。尚著者はこの件について一層深いリサーチの必要性を説いている。

L. J. Nord, M. Ed., OTR: An Interdisciplinary Educational Program. AJOT, 27 (7), 404-410. 1973.

(リハビリテーション学院, 作業療法士 矢谷令子)